

こいにようぼうそめわけたづな

恋女房染分手綱

〔解説〕宝暦元年（一七五一年）竹本座初演。吉田冠子・三好松洛の合作による全十三段の時代物。近松門左衛門の「丹波与作待夜小室節」の改作とされていますが、十段目「道中双六の段」、それに続く「重の井子別れの段」は、原文がそのまま使われています。

〔あらすじ〕丹波の藩主由留木（ゆるぎ）家の家老、伊達与之兵衛のせがれ、与作は竹村定之進（たけむらさだのしん）の娘重の井と通じ、与之助という子を設けますが、悪者の讒言で国を追われ、馬追いとなります。その後、重の井は由留木家の調姫の乳人となり、関東へ輿入れする姫君のお供で江戸へ出発しようとしています。

〔道中双六の段〕まだ幼い調姫は、関東へ行くことを嫌がりむづがっているので、門前の馬方三吉が持っていた道中双六で機嫌をとることにします。一番に上がった姫はすっかり機嫌を直して早く東へ行くこうと言いついで出るのでした。

〔重の井子別れの段〕三吉はお乳の人の名が重の井と聞いて、そんならわしの母さんだと取りすがり、守り袋を証拠に見せて、「行方の知れぬ父を捜し、親子三人で暮らしたい、昼は馬追い、夜は草鞋を作つて両親を養う」と健気に言います。重の井は、三吉が我が子と悟りつつ、三吉と姫君が乳兄弟であるとわかったら、姫の嫁入りのじやまになると思いい、「今は母でも子でもない」と言い聞かせます。いよいよ花嫁の行列の出發。重の井はそしらぬ顔で、姫君の慰みのために三吉に馬子唄を歌わせよと命じます。三吉は涙声に馬子唄を歌うのでした。

道中双六の段

たつ年月も迫り来て、由留木殿のお湯殿子、調しらべの

姫、はや十二歳になり給へば、かねがねの約束にて、

東の高家入間殿へ御婚禮極まり、蕾から取る花嫁御

けふ旅立ちの御供揃へ、上下ぎざめき賑はえり。

刻限は巳の上刻との定めにて、御迎ひの主家老本ほん

田弥三左衛門、数献の盃、足もとはよろ／＼と、猩々

緋の道中羽織白いところは髪ばかり、きんか頭に顔

色も、しゅちんの立ッ付け、りりしげに、

「何と／＼お供廻りが揃ったらお先手から乗り出し

召され。コレサ文左、源吾左、身はおさへを乗り申

す。万事夜前申し渡す通りだ。若党仲間あらしこ小

者に至るまで大洒をいたさないやうに、馬つぎ船渡

し等にて強気がさつを仕ったらば曲事くせいでおじやんべ

い。またとさ泊り／＼の赤前だれにじやらくら致さ

ないやうに。第一乗物の先で見苦しい。さりながら

とき、長の道中下々が退屈致すべし。もしぬれなど

を企つるとも目立たぬやうに物影へ寄つて、ちよこ

／＼／＼濡れたがよくおんじやる。めでたき折

からと申し、ことに女中のお供だ。少々の事は見遁

しにして置き召されつちや」

「あつ」

と答へて宰領ども、

「サア御立ち」

と催すところに、奥より女中声々に、

「ア、待たつしやれ／＼、気の毒やお姫様、『関東へ

行くことは嫌ぢや／＼』とやんちゃばかり御意なさ

れ、お袋さまも殿様もたらしつ叱つゝ遊ばせども、

『どうでも嫌ぢや』とおむつかり、お乳の人の重の

井殿いろ／＼と申されても『それほど江戸へ行きたくば乳母ばかり行きをれ』と、お乳の人の背中をとんとんとぶたしやんして、御機嫌がそこねました」と云ふところへ、眉泣きはがし姫君は、

「江戸も東もこちや嫌ぢや。おれは行かぬ」

と泣く／＼走り出で給へば、侍衆も下々も御門にかけ出で、家老のほか男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を変へ、

「コレ申しお姫様、下々の子供さへ、九つ十では物の聞き訳いゝまござります。江戸へいゝまござれば入間殿の惣領嫁御とかしづかれる御身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば女でこそあれ、乳母は腹を切らねばならぬ。

サアよいお子ぢやお輿に召せ」

とおどしてもそやしても、

「いや／＼みなの騙しぢや、なんの東がよいところ。

腰元どもが唄うを聞きや。サアみんなこゝへ出て、いつもの歌を唄へ／＼」

とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし、十二三なが手をそろへ、

「山も見えざるかりそめに江戸三界へ行かんしていつ戻らんすことぢややら、殺して置いていかんせの、放ちはやらじと泣きければ」

「ア、おきや／＼。お大名の宮仕へ、琴の組でも唄はいで誰に習うて端手な歌、姫君などにをしやんな。必ず置いて貰はう」

とお乳の人の不機嫌さ、本田もあまりせんかたなく、

「申しお姫様あれは人の口てんごう、花のお江戸は京まさり、浅草上野の花盛り、また堺町木挽町のでんつくでんつくでこの坊、弁慶や金平がえいやつ

と、えいなどと切り合を見せませう。道中の面白
いこと富士の山と申す天まで届く山を御目にかけ
ます。先年身どもが御結納の御使者に参つたとき
はお姫様はまだお二つ。なにとぞ御婚礼のお迎ひに
参りたいと申したが光陰矢の如しと今年丁度十一年
そのやうにやんちゃおっしやるまで長生きを致さう
とは存ぜんんだ。さあ御機嫌直して早うお輿に召し
ませい」

と力いっばいすかしても、

「いや〜江戸へは行きはせぬ。どうでも嫌ぢや」

と泣き給へば、お乳もいまはあぐみはて

「どうしてよからう」

御家老も、あきれてこそはいたりけれ。お仲居の若

菜門外より走り入り

「のうお乳の人さまおもしろい事がござります。

十ばかりのそりさげのちっぽけな馬方が、道中双六
とやら東海道の絵を広げ、味なこととして遊びます。
御機嫌直しにお目にかけなされませ」

「オ、ようぞ気が付いた。それは聞き及んだ。道中
の絵を見せまし、お心も移るため馬子でも子供は大
事ない。お赦しぢやその丁稚に持つて参れと云うて
おじゃ」

「心得ました」

と御門に出で、連れ立ち来たる馬方が片肌ぬいでさ
ばき髪、御前近くも不慮に縁先に揚げ足して

「ヤレ〜〜ありさまたちはあたっぽこしゆもな

い、朋輩どもとかけどくに道中双六打って、くつの
錢ほどしてこませうと思うたに、人呼び廻ってなん
でやる。ハレヤレ〜〜きり〜乗らっしやれ。

馬やろい」

とぞつかうどなる。

「てさて利巧な野郎ぢやな。船頭、馬かた、お乳の人、こちもそちらと同じこと、シテ年はいくつ名はなんといふぞ」

「年は今年十一。五つの年から馬追うて、一代若衆にならずに生へぬきの念者ぢや。ところで名はじねんじよの三吉といひやんす」

「オ、さッてもよい名ぢや。聞けば道中双六があるげな、腰元衆も打つて見や、姫さまも遊ばせ。サア三吉もこゝへ来い。苦しいない」

と呼びければ

「あい」

と云ふより慮外をも返り短かきさせるの煙。立ちまじりたる女中のそば、そぐはぬやうに見えざるは、さすが童の一徳と、絵を取り出し、双六をみな打交

り遊ばるゝ、

これ／＼御覽せ打たしやんせ。これこそ五十三次を、ゐながら歩む膝、膝栗毛馬はいい道中双六。南無諸仏分身と、書いた六字を六角の、さいは桜木花の都を真中に思ひ／＼のしるしを置いて、さらばこちらから打出の浜。大津へ三里こゝで矢橋の舟賃が出舟。召せ／＼旅人の乗りおくれじと、どき草津。お姫様よりまづ乳母が餅。一口二口みな口どちやうをどり越え、坂へ越すのも賽次第。賽を振れ／＼。降るや鈴鹿をあとに下れば負けまいと急ぎに急ぎより龜山に、煙草火打の石薬師。オット桑名の、舟渡し。所々の名物買って、おあしつくづく手まりこに、ひいふうみいよ、府中江尻にすつとんとん。とんと打つたる、沖つ波松原はるゝ、膏薬買って月を吸ひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原の花のかばやき名物の、うな

ぎの肌ぬま津の宿。三嶋越ゆれば箱根へ三里。賽目はだえ

次第に閑越ゆる。悪い目打てば手判を取りに、元の京都へ立ち帰る。

「合点か」

「才、呑み込んだ」

小田原外郎大磯平塚藤沢の、さはりもなしに双六のさい先もよし門出よし。道中早めてとつかはと急ぐほどがや神奈川越え、川崎を越え品川越え、まっさきがけのお姫様。一番がちの勝色の花のお江戸に着き給ふ。一のうらは双六の幸ひあり悦びあり、慰みありける道中とどつと

重の井子別れの段

興にぞ入り給ふ。

お側の衆にはやされて稚な心の姫君。

「かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サア
く行かうはや行かう」

「ヤアござらうと仰っしゃるか。そりや目出たいわ
目出たいわ又もや御意の変らぬ間に、行例揃へ」

と立騒ぐお乳の人は勇みをなし、

「そんなら今一度大殿様お袋様とお盃。これも馬方
殿お蔭ぢや。出かいたくそちには礼いふ褒美やる。
そこに待ちやや」

とぎゝめき渡り奥にお伴し入りにけり。馬方はつひ
に見ぬ金の間をうそくと、覗き廻れどむしろ筵のほか、
踏みも習はぬ備後表。

「エ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも、こつちの内が結構でござる」

と、独り言してあたりけり。お乳の人は大高に、お菓
子さまさま文匣に盛入れ、

「ドレ／＼三吉そこにか。マア／＼そちは健者けんものぢや。

道中双六お目にかけてそれゆゑに姫君様、お江戸へござろと御意なさるゝ。お上にもご機嫌これは御前のお菓子ありがたう頂きや。お錢三筋買ひたい物買やゝ。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はうと云や。見れば見るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身は、マよく／＼であらう」

といと懇ろの詞の末。三吉つくづく聞きすまし、
「由留木殿の御内、お乳の人の重の井様とはお前か。

そんならおれが母様」

と抱きつけば

「ア、こは慮外な。おのれが母様とは、馬方の子は持たぬ」

と、もぎ放せばむしゃぶりつき、引退くれば縋りつき、

「なんのないことを申しませう。わしが親はお前の昔の連合ひ、この御家中にて番頭、伊達の与作。その子は私こな様の腹から出た、与之助はわしぢやわいな。父様は殿様のお気に違うて、国をお出なされたは小さい時で覚えねど、杓掛の乳母が話には、母様も離別とやらで、殿様に御奉公。こなたを乳母が養育し、父様に逢はせたい思へども、甲斐もない、母様の細工の守り袋を証拠に、由留木殿のお乳の人、重の井様と尋ねよ、と懇ろに教へて乳母はおれが五つの年、久しう痰を煩うて鳥羽の祭の餅が咽に詰った

やら、つひ死んでのけました。乳母が子の一平は父様を尋ねに行く、在所の衆が養うて、やうく馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。

コレ、守り袋を見やしゃんせ。なんの嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。ほかの望みはなんにもない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人、一所にゐて下され。見事く杳も打ちます。この草鞋もわしがつた。昼は馬を追うて夜は杳打ち草鞋作り。父様母様養ひませう。父様と一つにゐて下され。拝みまする母様」

と取り付き抱き付き、泣きゐたり。お乳ははつと気も乱れ、見れば見るほどわが子の与之助。守り袋も覚えあり、飛びついて懐に抱き入れたく気は急げども、

「アッア大事の御奉公養ひ君のお名の疵、偽って叱

らうかイヤ可愛げにさうもなるまい。マアちよつと抱きたい。ア、いかなる因果な生れ性。現在わが子に馬追ひさせ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これがなにゝなること」

と声を忍びに泣くばかり。子は生れつき賢くて聞分けあるほどなほ泣き入り、

「悲しい話を聞きました、さりながら、常に乳母が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母様にさへ逢うたらば父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし」

と云へばちやつと口を押へ、

「ア、勿体ない。その乳兄弟は云はぬこと。姫君様は関東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間体。三吉といふ馬追ひ

が乳兄弟にあるなどと、どう妨げにならうやら、蟻

の穴から堤も崩れる。軽いやうでも重いことひそひ

そ云うて人も聞く。まづ早う出てくれ」

と泣く／＼云へば三吉。

「ア、母様。あんまり遠慮過ぎました。まづ云うて見て下され」

「まだ云ひをるか聞き分けない。夫のことわが子のこと母に如才があるものか。合点の悪い聞き分けない」

と、制する内に奥よりも、

「お乳の人はどこにぞ。御前から召します」

と呼ばれば、

「アレ聞きや人が来る出ても」

と、手を取つて引出す。不憫や三吉しくしく涙。頬冠りして目を隠し、沓見まつべて腰につけ、見すばら

しげな後影。

「コリヤま一度こちら向きや、山川で怪我しやんな。雨風雪降り夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしても。毒な物喰はずに下痢や麻疹の用心しや。可愛の形やいたいたしや。千三百石の代取がなんの罰ぞ咎めぞ」

と、式台の壇箱に身を投げ伏して歎きしが、懐中のありあふ一步十三袂紗に包み、

「これ嗜みに持つてゐや」

と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、

「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬお構ひ。その一步も入らぬ。馬方こそすれ、伊達の与作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貰ふ筈がない。エ、胴慾な。母様覚えてゐさしやれ」

と、わつと泣き出すその有様。母は魂消え入つて、

「養ひ君お家の御恩思はずば、さて一人子を手放してなんのやらうぞ。奉公の身の浅ましや」

と悶え、焦れて歎きける。時に奥口ざらめいて

「はや御立ち」

と姫君の、御輿かき上げ行列立て、お乳の人の乗物を、ひら付けにこそかき寄せけれ。お乳はさあらぬ

顔付して

「姫君のお伽に、最前の馬方をこの乗物に引付け、

お慰みに唄はしや」

「畏った」

と宰領ども、

「コリヤそこな自然生め。唄ひをらう」

とぎこつなく。

「ヤアこいつは吠へをるか」

「なんぢやこりやいまいましい」

と、握り拳を二つ三つ、頂きながら泣声に、

へ坂は照るく、鈴鹿はくもる。土山間の、間の土

山、雨が、降る。

降る雨よりも親子の涙、なかにしぐるゝ雨やどり。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承下さい。